

平成 12 年 1 月 21 日

かつて区内を流れていた川筋を辿って

冊子『旧谷端川の橋の跡を探る』

郷土資料館で活動する区民グループが発行

この度、豊島区立郷土資料館で活動している区民グループ「豊島区立郷土資料館友の会」（会長：小池陸子さん）が、暗渠化により姿を消した区内最長の川、「谷端川」にかかっていた 67 の橋を写真と文章で辿った『旧谷端川の橋の跡を探る』を発行した。

谷端川は、要町栗島神社の自然湧水池である弁天池を水源とし、かつての長崎村、滝野川村、巣鴨村を経て小石川村に通じる、現在の豊島区から文京区を流れ神田川に合流していた延長 11km に及ぶ河川で、区内を貫通する最長の川だった。また江戸時代には千川上水からの分水も行なわれ、田畑の用水として利用されるなど、流域の生活に深く密着していた。しかし、都市化とともに近郊農村としての機能が急速に失われ、また川幅が狭かったため、たびたび洪水の被害をもたらしていたこともあって暗渠化が進められ、昭和 39 年には全域の暗渠が完成し、その姿を消した。

今回発行された冊子『旧谷端川の橋の跡を探る』は、その谷端川の源流から流末までにかかっていた有名・無名の 67 の橋をとりあげ、そのルーツとともに現在の姿を写真で紹介している。その地域の特色や由来に因んでつけられた橋の名とともに、暗渠化とともに姿を消した橋や、遊歩道として整備された「谷端川親水公園」に新たな意匠で蘇った橋、またかつての懐かしい橋銘板など、多くの写真が掲載されている。また、その流路をしるした地図も掲載され、郷土史探索ガイドマップとしても活用できる。（B5 判・35 ページ、1000 部発行）

今回の資料のもとになったのは、同会が発行している通信『豊島区立郷土資料館友の会だより』の第 21 号～35 号（平成元年 8 月～同 4 年 9 月）に掲載された「谷端川橋名私考」（清水治男氏同会会員執筆）と、同 39 号～52 号（平成 5 年 6 月～同 8 年 11 月）に掲載された「続谷端川橋名私考」「続々谷端川橋名私考」（田崎不二夫氏寄稿）の連載記事。今回それらの文章に加筆し、流路図や現況写真を加えて、一冊にまとめられた。

会では、小中学校、図書館等区内の各施設に配布するほか、区の歴史に興味を持っている人たちにも配布する予定（配布方法等は区広報紙でお知らせする）。

かつて川は、地域の景観を彩る重要な要素として、また日々の暮らしと深く結びついた存在として東京の街を縦横に流れていた。急速な都市化の中で、そうした川のほとんどが姿を消した今、先人の残した郷土の生い立ちを知るてだてとして、また、薄れゆく地域の景観の記憶を後世に伝えるものとして、今回の資料が広く活用されるようにと考えている。

「豊島区立郷土資料館友の会」は、昭和 60 年、郷土資料館が 5 年計画で実施した地域の歴史生活資料所在調査をきっかけに、調査員として参加・協力した区民有志を中心に同年 10 月に発足した。現在会員約 50 名。史跡見学会や講演会などの月例会、『友の会だより』の発行、古文書学習会等の活動の他、郷土資料館の資料や埋蔵文化財の資料整理、また館主催の特別展では館内案内・監視などの運営面でも協力している。

詳細：豊島区立郷土資料館